

No.139
2002.
10.31

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内

岐阜県博物館協会

TEL 0575-28-3111

振替名古屋637909

ハンズオン展示について

岐阜市歴史博物館館長 白水 正



ハンズオンという言葉が広まったのは、まだ最近のことである。一部では使われてはいたようだが、歴史博物館、歴史民俗資料館などで使われるようになったのは1999年に文部省が「親しむ博物館づくり」

事業を展開し、その基本手法をハンズオンとしたことによる。もちろん、それ以前から、体験学習という言い方で、参加型の展示があったわけで、手法そのものは目新しいものではない。しかし、体験学習といった場合、概念が広すぎてあいまいな部分があり、ハンズオン(手で触る)という、より直接的な表現の登場で、視点が明確になった。一般的に博物館の展示資料は、見て学ぶものであって、触れてはいけないというのが基本であるが、ハンズオン展示は直接、実物資料に触ることによって、素材の持つ感触や重さ、あるいは使い方を具体的に知ることができる。また、一方、触るという行為はそれだけで親しさや楽しさを増してくれるものであり、導入部としての利用にも適している。

こうしたハンズオンの展示は小学校の生徒に適した学習法ということで、取り入れる博物館が急速に増加している。岐阜市歴史博物館でも毎年1月から2月にかけて開催している「ちょっと昔の道具たち」展でハンズオンの手法を大幅に取り入れている。この展覧会は小学校3、4年生を対象に、道具を通して昔の暮らしを体感してもらおうというものである。会場では、展示ケース内に陳列されているもの以外はすべてハンズオンとし、触ること、使うことを基本にしている。そのため、常時3、4人の「もの知り博士」という名称のボランティアを配置して対応している。もの知り博士はだれでもなれ

るが、主戦力は小学生から見て祖父母にあたる世代で、実際の生活の中で展示品の道具を使ったことのある人たちである。道具の使い方から、当時の暮らしぶりまで語ってくれる大事な存在である。学校側からもこうしたハンズオンの展示は好評で、13年度は120校が見学に訪れた。

こうしてみるとハンズオンは良い事ばかりのようであるが、実は問題点もいくつか浮き彫りになってきている。博物館側としてはハンズオンを手がかりにして、展示ケースに並ぶ資料を見てほしいと願い、クイズ問題なども作ったりしているのであるが、子どもたちはどうしてもハンズオンのコーナーに興味がいき、ケース内には目が向かない。それではハンズオンのコーナーを資料と離して作れば良いかという、これはこれで、複数の音や話し声が錯綜するため騒がしくて生徒の集中心を奪い、説明もしにくいことになる。

ハンズオン展示で、ほんとうにたいへんなのは実は裏方の準備である。実際の道具を使えば、磨耗、損傷はつきものであり、管理と修復に常に気をつかわなければならない。さらに、材料の絶え間ない補充も必要である。毎日、閉館後は翌日の準備でおおわらわになり、少しでも空いた時間は点検、補修、補充にあてられる。館員の労力は相当なものであり、展覧会中、身体が保つか心配になるくらいである。ハンズオンが有効な展示法であるのは間違いないのであるが、1日限りのイベントでない場合、その背後に膨大な労力と物量がそびえていることを事前に把握しておかなければならない。綿密な計画と準備こそがハンズオン展示の成功のもとである。

毎年、担当者にたいへんな思いをさせながら、今年もまた、前年度より少しでも楽しいハンズオンができないだろうか、つい考えてしまう今日この頃である。

「鍼灸の歴史からみたツボ押し健康法」

日時：平成14年6月23日13:30~15:00

場所：内藤記念くすり博物館 大ホール

講師：森ノ宮医療学園専門学校・はりきゅうミュージアム研究員

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部客員研究員

長野 仁氏

参加者：122名

内藤記念くすり博物館で11月24日まで開催中の企画展「鍼のひびき 灸のぬくもり ～癒しの歴史～」の開催を記念して、同展監修の長野仁氏を講師にお迎えして講演会が行われました。



鍼灸には約三千年の長い歴史があります。鍼（はり）と灸（きゅう）は、中国大陸で発祥し朝鮮半島と日本列島に伝播した、東アジアの伝統医学（東洋医学）です。しかし歴史だけでなく、鍼や灸、ツボや経絡そのものについて一般にはあまり知られていません。

そこでまず初めに、鍼灸にまつわる言葉から、それぞれの意味やその起源についての説明がありました。

「ツボ」を表現する際に使った漢字が、日本では「壺」「坪」、中国では「穴」「俞」と書きます。昨今の“癒しブーム”から注目を集めている「癒し」という漢字そのものを見ても、ツボが病と心を癒すということに通じています。

また、灸（きゅう）のことを「やいと」とも言いますが、「やいと」は「焼処（やきどころ）」とも書き、不本意に焼けてしまう「やけど」とは同じ焼くでも意味が異なります。「やき」は食べ頃の焼き魚を示すことから分るように意図的に焼き、「やけ」は焦げてしまった魚や火傷から連想するように過失による焼け方なので、灸の「やいと→やきどころ」は、「やけど」とは異なります。

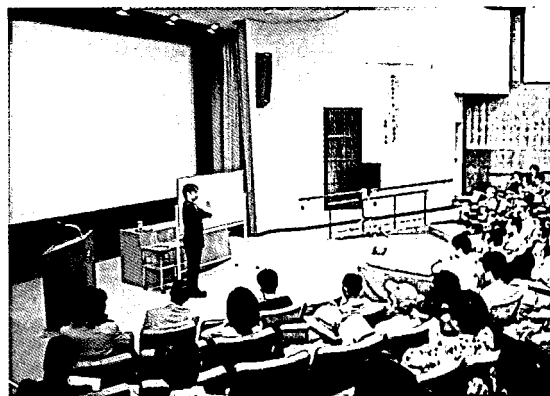
そして「針」「鍼」、どちらも同じ「はり」ですが、一般的に「針」は縫い物の針や尖っ

た道具を、「鍼」は医療用具に対して使う場合が多いようです。また、「箴言（しんげん）」とは、戒めとなる短い言葉のことで、「鍼」は「箴」と通じる部分もあります。

このように鍼灸にまつわる言葉の語源から、参加者はそれぞれが持つ意味について学び、鍼や灸そしてそのツボについての理解を深めました。

また、手を使った療法「手入れ」や「手当て」という言葉には、手を入れたり、当てるという言葉通り、健康法（美容法）として手に手を入れることが重要です。実際に両手を擦り合わせて温くなった掌（てのひら）を、そっと閉じたまぶた当てることで目の疲れを癒し、腹部に当てることで胃の働きを整え、促進するなどの基本的な健康法についての説明を受けました。

こうして両手を合わせる健康法、左右の手の指を使った体操や、体の力を抜いて、万歳の姿勢で両手をぶらぶらさせたり、手を下げて腿の横で手をぶらぶらさせたりするなど、会場内でも簡単にできる手を使った健康法のいくつかの紹介があり、終了する頃には参加者の手は自然に動いていました。



講演会終了後は、企画展示室に場所を移して、講師の先生より企画展の展示資料についてのご説明がありました。展示物1点1点についての詳しい解説をお聞きした後、会場内では先生を囲み、参加者と健康についての質疑応答がおこなわれました。

（機関紙委員 内藤記念くすり博物館 野尻佳子子）

「日本文化と岐阜県」

日 時：平成14年7月14日（日）14：30～16：00

場 所：大垣スイトピアセンター

講 師：梅原 猛氏

参加者：750名



「えー、会長の矢橋和江さんと副会長の矢橋龍宜さんが、半年前に頼みにこられまして、私は体をこわしているのですが、親戚の頼みは断れない。私と同世代の竜太郎の供養にもなるとお引き受けした次第で・・・」と開口された。そして次の5項目にしたがってユーモアたっぷりに話をされた。

1 私と岐阜県

旧制八高の出身であるので、岐阜中学や大垣中学の出身者とともに学んだ。私の結婚相手のふさは、西尾市の大地主稲垣家の四女でその母しげは、赤坂宿の脇本陣矢橋家の出身で矢橋龍吉の妹である。龍吉は趣味も多く牡丹園をつくる一方、梁川星巖の漢詩集などを刊行するなど風流人であり、文化人であった。

矢橋家の縁でしばしばこの地をおとずれた。私の作品「ヤマトタケル」には伊吹山の山神が、「オグリ」には美濃赤坂の女郎屋が登場する。

2 縄文と弥生の文化の混合としての岐阜県

岐阜県は美濃と飛騨という正反対の文化を持つ土地である。美濃は弥生文化の地、飛騨は縄文文化の地とみななければならない。この二つが混合しているのが岐阜県である。

3 東西文化の接点としての岐阜県

初期の弥生文化は尾張までいったが、三河には入らなかった。kya,kyu,kyoを使った名古屋弁に似た言葉が、九州の一部地方にあるが、熱田神宮は東征の前線基地と考えてよい。また岐阜は名古屋文化の影響が強いが、大垣は

京都文化の影響が強い。

4 古田織部と円空

二人とも岐阜県が生んだ、斬新で、抽象的でユーモアのある素晴らしい芸術家である。円空は飛騨の匠の技を受け継ぎ行基佛の伝統を江戸時代になって、復興したものと思われる。彼の代表作である、両面宿禰に強く惹かれる。

5 岐阜文化と特徴と可能性

（この頃は、時間がなくさっと通られたので私流に解釈すると）

二つの大きな文化縄文と弥生、東と西の文化、この二つの知恵を学ぶことが大切である。両方の精神をもつことが必要である。

円空の作品両面宿禰のように二つの面を一体に合わせて持つところに岐阜県の可能性がある。

梅原 猛氏は、「共生と循環」ということを自分の思想として強調されている。今回の講演は、素材として岐阜県を例に挙げながら、異文化の共生の大切さを、私たちに諭されたように受け取った。

また縄文文化のなかに現在の私たちが見失ったものがあり、それを再発見することの必要性を著書の中で書いておられる。今回の話のなかにもそのことを感じさせる内容が、多分に含まれていた。

この講演会は、大垣市文化財保護協会設立30周年の記念講演会に便乗した形になったが大変よい企画であった。中の通路に臨時の椅子を並べても、立ち聞き？する方も多く盛会で大垣地区の文化性の高さを感じた。

梅原 猛氏 哲学者

大正14年（1925）生まれ。京都大学文学部卒業。昭和62年国際日本文化センター所長。平成11年文化勲章受賞。

（機関紙委員 海津町歴史民俗資料館 瀬古尹宏）

市之倉さかづき美術館

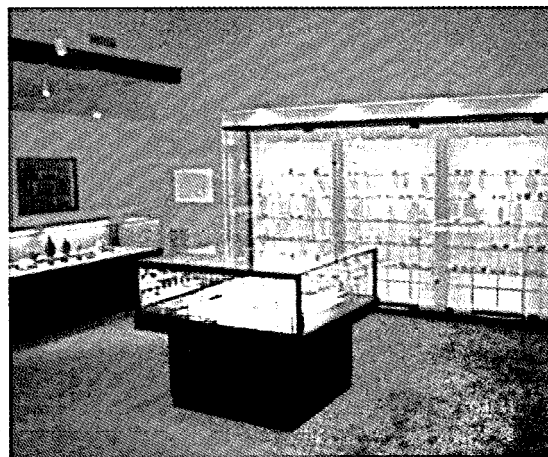
〒507-0814 多治見市市之倉町6-30-1
TEL 0572-24-5911 FAX 0572-24-6766
URL <http://www.sakazuki.or.jp>



瀬戸市と隣接する多治見市市之倉に盃（さかづき）をテーマにした美術館が平成14年4月にオープンしました。市之倉では古くから窯業が営まれ今でも窯元が多く残る街です。特に幕末から現代にいたるまでは、盃の産地として全国に知られています。さかづき美術館は地元の協同組合が中心となって町づくりの一環として設立されたもので、市之倉はもちろん全国の盃を展示し、あわせて酒にまつわる様々な文化や背景を紹介しています。

館内1階では、各時代の盃が展示されています。なかでも、明治時代に作られた盃の薄さ、白さは現代の技術をもってしても再現するのは難しいそうです。当時開催されたパリ万国博覧会などで入賞した加藤五輔をはじめとして五平、四郎兵衛、幸兵衛などの作品も展示されています。また京都、有田、九谷、瀬戸などの異なる産地の盃も紹介しています。

なかには、変わった盃も展示されています。戦時中の国民の戦意を高揚させるための兵隊盃と呼ばれる国旗や戦艦の絵が描かれている盃や、可盃（べくはい）と呼ばれる、置くと倒れてしまう盃、穴が空いていて指でふさぎながら飲む盃などは遊び感覚のものです。また、世界の酒器展示室では祭器として用いられた青銅製の酒器が展示されています。



2階の巨匠館では地元の輩出した人間国宝作家などの作品を常設展示しています。1階ミュージアムショップでは、ミュージアムグッズの販売と共にボックスギャラリーが設けられ様々なジャンルの作家、窯元が自慢の作品を展示販売しています。また同じ敷地内には洋風レストランが併設され、そこで使われている食器と同じものがミュージアムショップで買い求めることができます。



【交通】JR中央線多治見駅から「下半田川」行きバス乗車、「南市之倉」下車

【駐車場】約80台（無料）

【開館時間】午前10時～午後5時

【休館日】火曜日

【入館料】一般400円 大・高生200円
幸兵衛窯と共通入場券
一般600円 大・高生300円
（ともに中学生以下無料）

（機関紙委員 土岐市埋蔵文化財センター 中高茂）